11

「青洲先生療乳癌図記」について

――華岡青洲と広瀬屋利兵衛の妻

松木明知

華岡青洲は自ら開発した麻沸散（麻沸湯とも通仙散とも言う）を用いた全身麻酔下に多様な手術を行っているが、最も心血を注いだのが乳癌に対する手術であった。このことは、全身麻酔下最初の手術が五条駅藍屋利兵衛の母かんの左乳房の癌の手術であったこと、また治療した乳癌患者の姓名録が遺されていることなどから容易に首肯されるところである。

呉秀三の著書「華岡青洲先生及其外科」に掲げる「乳巖姓名録」には文化元年（一八〇四）から嘉永元年（一八四八）まで計一六五症例が示されており、この中に三発例、再発例も含まれているので、患者数としては一五五名である。青洲が没した天保六年（一八三五）十一月以降はもちろん弟子が治療した。

このように青洲が最も力を注いだのは乳癌の手術であったが、にも拘わらず乳癌手術の詳細については余り知られる所がない。

最初の症例である、五条駅藍屋かんの手術については「乳巖治験録」があり、その詳細は知られるが、他に「河内屋清右衛門の妻」、「廣瀬利兵衛の妻」、「長大夫の妻」、「松波三十郎の内」の四名の手術記録が右の呉の著書に引用されているのみである。この中で例三の「飛州高山廣瀬利兵衛　妻」は藍屋かんの記述に次いで最も詳細な記録である。

呉の書に「春林軒蔵乳岩図譜」から引用した記述によれば、青洲の門人野村鄂は、この症例についての詳細な記録を廣瀬利兵衛の求めに応じて作ったとある。最近演者は野村の作製した写本（原写本）か、あるいはそれに極めて近いと思われる一写本を入手したので、その概要を紹介する。

これは題箋に「青洲先生療乳嵒図記　全」と題する状態の良い写本である。縦二七・五センチメートル、横二〇センチメートル。表紙、裏表紙も揃い、本文は十八枚

である。前半の十三枚には、藍屋かんの図、メスと鋏、手術の図（四図）、さらに「鍛冶屋治兵衛の妻」から「和州五條駅　勝股元碩の妻」まで十二名の患者の摘出した乳癌組織の彩色図が示されている。

十四枚目から十七枚目にかけて「記青洲先生療乳嵒」と題して、飛州高山廣瀬利兵衛の妻の乳癌治療が詳細に記述されている。呉の引用する「春林軒蔵乳岩図譜」からの文と本文と比較すると、十数カ所に差違が認められるものの、本質的な違いはない。

廣瀬利兵衛の妻の手術は本写によれば、文化七年（一八一〇）五月に行われたとあるが、呉の書にある「乳巖姓名録」には文化七年の条に廣瀬利兵衛の妻はなく、文化十年（一八一三）九月既望に「飛州高山廣瀬屋利兵衛妻」とある。本写本の記述のように文化七年（一八一〇）に手術が行われたと考えられるが、何故三年の差が生じたのかの理由は定かではない。あるいは文化七年（一八一〇）に手術が行われたが、門人が「乳巖姓名録」への記入を失念し、文化十年（一八一三）に再手術したとも考えられるが、この場合、「再発」の記載を忘れたことになり、誤りを二つも犯したことになり、その可能性はより低い。

このことは、次のことによっても傍証される。廣瀬利兵衛の妻が青洲の許を訪れた際、青洲は患婦に向かって、自分はこれまで二十数例の乳癌患者を治療していると述べているが、文化七年に手術を受けたとすれば、二十四症例目（患者として二十一人）となり、青洲の言と一致し、文化十年とすれば、第五十七症例目となり、青洲の言と一致しない。

本文によって当時乳癌の治療にいかに難渋したか、青洲の乳癌治療の情報がどのように伝えられたか、青洲がいかに患者に接したかが知られる。

患者の廣瀬利兵衛の妻について、その没年を求めて、高山市全寺院を調査した結果も併せて報告したい。

（弘前大学医学部麻酔科）